

『G-TEN』-「元の理」研究から見えること - 六号50. 「神月日」の解釈について -

50. このよふのしんじつの神月日なり あとなるわみなどふぐなるそや

『G-TEN』は1985(昭和60)年7月に創刊され、1991(平成3)年3月の60号が最後になったほぼ毎月発行の雑誌です。毎号特集のテーマがあり、また、シリーズ「元の理」研究があって、こちらは59号まで、40回掲載されました。

『G-TEN』に掲載された主なる論考は、1987年から刊行された「講座『元の理』の世界1~7」や「教養ブックス1~16」に収められました。しかし、創刊から40年が経過した今、その様な雑誌の存在も忘れ去られようとしています。今回は、『G-TEN』に掲載された論考、特に「元の理」関係のものを読み直して、天理教の問題点、及び進むべき方向を問いたいと思います。

G-TEN創刊によせて / 清水國雄 (天理教表統領)

たがいに立てあいたすけあうことは、をやへの孝行であり、私たちの信仰生活の中でいつも強調されている。しかし、たがいに立てあいたすけあうために欠くことの出来ない基礎については、案外、関心度が低いのではなかろうか。 / 教祖はおふでさき第五号八のおうたに

をやこでもふう / \ のなかもきよたいも みなめへ / \ に心ちがうで

と仰せられている。親子、夫婦、兄弟姉妹という身近な者同士でも、お互いの違いというものがある。 / くせ、性分の違いや育った生活の違い、年令、性別、学歴、経験等の違いはお互いのたすけあいの上にも微妙な影響をもたらす。 / こうした点を見落していると意外な大事をひきおこすことにもなりかねない。 / 身近かな者の間柄は勿論、日本人同士でもお互いの違いを知りあうことが大切である。

まして、日本人以外の人々への布教伝道ということになると、こうした問題、例えば、異文化の理解と交流等の必要性が一そう重要になる。 G-TENは、地と天の意味のシンボルであって、地は、私たち人間の生活の場であり天は地を包む摂理、天の理であると申せよう。従って、地は、人間のたすけあいの場であり天の理にそうてたすけあいの基礎を築く所でもある。 / 人間は今日、地球的規模の生活が出来たようになったが、全地球的なたすけあいを実現するためには、その基礎工事を更に一そう多角的に進めなければならない。それは、世界たすけをおせきこみ下さるをやの御期待にお応えする方途でもある。教内本の整理統合が叫ばれている折柄、私はその総合を促進する指標を見出すという狙いをもって、あえてG-TEN創刊に賛同する次第である。

皆様のご理解とお力添をお願いして序文を了わらせて頂きたい。(『G-TEN』1号.P2.天理教表統領室教養問題事務局編.1985) 1

「G-TEN」リスト

『G-TEN』は毎号、特集のテーマについて教外研究者、及び教内者(天理大学、天理教校の教員、教会長等)の論考が10篇前後掲載されています。教外者が8～9割。

1号が1985年7月に創刊、最後の60号は1991年3月で、5年間、ほぼ毎月発行されています。

また、「シリーズ『元の理』」として、40回にわたって「元の理」に関連した論考が出ています。

さらに、『G-TEN』掲載された論考は、テーマ別、著者別に「講座『元の理』の世界」全7冊、「教養ブックス」全16冊に加筆修正されて再録されました。

号数	特集	号数	特集	号数	特集
01	西と東	21	たましい	41	「おふでさき」の世界
02	シリーズ「元の理」研究②	22	生命の記憶	42	続・「おふでさき」の世界
03	経営と宗教	23	「原典」と「ことば」	43	「病い」と「文化」
04	在来思想と天理教	24	女性・母性	44	善と悪
05	触のもつ意味	25	宗教と生命・科学	45	不老・不死・かんろ (1)
06	出直しーその論理と周辺	26	「伝道」と「文化」	46	環境と人間
07	「巡礼」と「かえる」こと	27	「和」と「一手一つ」	47	不老・不死・かんろ (2)
08	にをい	28	陽・気	48	「水と神」の世界(1)
09	コスモス・生命・宗教	29	「ボランティア」と「ひのきしん」	49	「水と神」の世界(2)
10	「ふしん」と「建築」	30	あいずたてあい	50	「神秘考」
11	科学と宗教	31	食べる・味わう	51	女性・男性・家族
12	やまい・いやし	32	人間の進化	52	地球・宇宙と人間
13	「ざんねん」の構造	33	人間・文化・未来	53	一神教と多神教
14	蔵内「元の理」学	34	もの・ころ	54	人間の脳
15	「不思議」考	35	自由・自在	55	予言
16	「労働」と「はたらく」こと	36	脳死は「死」か	56	都市と神殿
17	からだ・ころ	37	続・脳死は「死」か	57	心の宇宙・宇宙の心
18	宗教ー過去・現在・未来	38	文化の未来	58	経済・体制と宗教
19	陽気・遊び	39	科学と宗教の未来	59	霊と魂
20	「老い」を考える	40	宇宙と人間	60	正統と異端

号数	シリーズ「元の理」研究	シリーズ「元の理」研究リスト(1)
01	1.「元の理」の研究史	「元の理」－天理教教典第三章「元の理」。「元の理」研究史概論,西山輝夫。「元の理」参考文献。
02	2.「元の理」の世界化と文化の問題について	「元の理」展開の時代区分について,「元の理」その比較文化論の試み,井上昭夫。新・有神論としての「元の理」の位置,エル・アハバル・ダリユシュ・シャガン.井上昭夫。
03	3.「元の理」の現在的意味	「元の理」と私,深谷忠政。現代人と「元の理」,松本滋。
04	4.在来思想と天理教	仏教と天理教,カル・ベッカー。「元の理」と日本の伝統,藤島佳夫。きわ立つ教え「かしのもの・かりもの」,ラッセル・ブラックウッド。
05	5.「元の理」の深層	「元の理」の深層心理学的解釈,湯浅康雄。精神心理学から見た「元の理」,野村秋人。
07	6.大龍と大蛇	大龍と大蛇－大和の神話、伝承から－,石崎正雄。龍と蛇が象徴するもの、村上三恵子。
08	7.亀	人間と亀－亀の神秘的生態と人の関わり,内田至。「亀」が象徴するもの－民俗学、神話学の視点、笹目泰和。
09	8.シャチとウオ	シャチとジュゴン－そして海の動物との関わり,中村幸昭。男性的機能を象徴するもの－シャチとウオ,今井英夫。
10	9.連載	「元の理」に見る男性と女性Ⅰ 森井敏晴 参考資料「元の理」－天理教教典第三章「元の理」。
11	10.連載	「元の理」に見る男性と女性Ⅱ //
12	11.連載	「元の理」に見る男性と女性Ⅲ //
13	12.連載	「元の理」に見る男性と女性Ⅳ //
15	13.連載	「元の理」に見る男性と女性Ⅴ // 「うを」と「み」の動物学的、象徴的意味の考察
16	14.どじょう	ドジョウ－その生態と人間とのかかわり,石田力三。ドジョウ・そのすばらしき神の使い,村上三恵子。
17	15.連載	「元の理」に見る男性と女性Ⅵ // 元の理に見る「月」と「日」
19	16.神話と「元の理」	比較神話学からみた「元の理」について,大林太良。「元の理」の神話的解釈,村上三恵子。
20	17.「元の理」と深層心理	深層心理と「元の理」,河合隼雄。不易な教育＝「元の理」－教育を受ける側の心理的態度,今井英夫。
21	18.「元の理」と中国思想	中国思想からみた天理教,加地伸行。神との再遭遇と「元の理」,今井英夫。
23	19.「元の理」と天体	十柱の神の星々について,大柳義徳。「元の理」とコスモスの創造－選択創造－,今井英夫。
24	20.「元の理」と遺伝子	遺伝子学と「元の理」抄,桧垣正夫/構成西山輝夫・辻井正和。

シリーズ「元の理」研究リスト(2)

号数	シリーズ「元の理」研究	
26	21.「元の理」と思想	「元の理」と世界思想－特に易との関連から－,蔵内数太。
27	22.「元の理」研究史(2)	「元の理」研究の系譜,西山輝夫。
28	23.「元の理」と密教	<u>「元の理」と密教－主に曼荼羅を通して</u> ,松長有慶。
29	24.神話と「元の理」(2)	宇宙神話としての「元の理」－道教との関連もふまえて,湯浅泰雄。
30	25.原典と「元の理」	おふでさきと「元の理」,芹沢茂。
31	26.原典と「元の理」(2)	おさしづと「元の理」,深谷忠政。 天理教教典第三章「元の理」。
36	27.原典と「元の理」(3)	「みかぐらうた」と「元の理」,中島秀夫。
41	28.「元の理」の象徴	「元の理」と「『切れ』の構造－どじょうとフグが象徴するもの」,大橋良介
42	29.「元の理」学び雑記	親神のお働きの理と漢数字の意味,森井敏晴。
43	30.「元の理」と「気」	気・身体・「元の理」,石田秀実。
44	31.「元の理」と「つとめ」	舞踏としての「つとめ」,小林正佳。
45	32.「元の理」と「こふき」	「こふき」と「元の理」,矢持辰三。
46	33.言語と「元の理」	「元の理」言語の特異性－その表現的分析,太田登。
47	34.比較宗教と「元の理」	「泥海こふき」の比較宗教的分析,大橋良介。
49	35.フグと「元の理」	フグと「元の理」,北濱喜一(日本フグ研究会会長)
50	36.神界と「元の理」	<u>神界の宇宙と「元の理」</u> ,鎌田東二。
55	37.「見立て」と「元の理」	「元の理」と「見立て」－宗教学的視点から－,澤井義次。
57	38.虫と「元の理」	虫と人間,梅谷献二(農林水産省果樹試験場長)
58	39.「元の理」と「創世記」	「創世記」と「元の理」－「言葉」と「行い」は陽気ぐらしの基本,ピノ・マラス。
59	40.魂と「元の理」	「たましいの物語」としての「元の理」,松本滋。

発行年	シリーズ	題名	著者	テーマ
1987.10	講座「元の理」の世界1	「元の理」の人間学	教内外13名	「元の理」の思想、深層、文化。
1988.12	講座「元の理」の世界2	「元の理」の象徴学	教外を主に13名	創造、救済、伝道としての「元の理」
1989.12	教養ブックス①	みかぐらうたの世界	西山輝夫	用いられている言葉個々の解釈
1990.05	教養ブックス②	神・人間・元の理	森井敏晴	天理教教会長のエッセイ
1990.05	教養ブックス③	現代・思想・元の理	井上昭夫	論文、エッセイ、対話集
1990.09	講座「元の理」の世界3	「元の理」と甘露台	教外を主に8名	「かんろだい」の考察
1990.09	教養ブックス④	「いのち」の進化	塩沢千秋	生命科学の現場からさぐる「元の理」
1991.07	教養ブックス⑤	たましいの物語としての「元の理」	松本滋	「G-TEN」掲載の論文集
1991.10	教養ブックス⑥	水中住まいのサル	高橋定嗣	信仰告白のエッセイ集
1992.04	教養ブックス⑦	総説天理教学	中島秀夫	「天理人間学」に向けての総合的考察
1992.06	講座「元の理」の世界4	「元の理」の動物学	教外を主に13名	「元の理」に出て来る動物の意味
1992.07	教養ブックス⑧	世界は鏡	教内外12名	「鏡」の考察
1992.10	教養ブックス⑨	信仰と文学の間	上原繁道	「こふき」の再構築に向けて(エッセイ集)
1993.03	教養ブックス⑩	風の心	芹沢茂	「おふでさき」解釈
1993.06	教養ブックス⑪	人間環境の内と外	教外を主に6名	自然環境とこころの深層
1993.11	講座「元の理」の世界5	「元の理」と現代	教内外12名	現代思潮、現代生活、現代人と「元の理」
1994.08	教養ブックス⑬	匂い・鼻・病い	栗田長吉	天理教教会長のエッセイ
1997.04	教養ブックス⑫	こうきと裏守護	石崎正雄	「裏守護」の意味するものは何か
1997.04	講座「元の理」の世界6	「元の理」と原典	主に教内9名	原典と「元の理」
1997.05	教養ブックス⑭	天理教と文学者	梶山清春	文学者による天理教の描出
1997.06	講座「元の理」の世界7	「元の理」の展開	教内外8名	“たとえ”の理話としての「元の理」
1998.10	教養ブックス⑮	天理教学の未来	井上昭夫	著者の論考集
1999.10	教養ブックス⑯	脳死・臓器移植を考える－天理教者の諸見解		

「G-TEN」の名前について

雑誌名である「G-TEN」について、1号にその理由が書かれています。「ぢてん」を漢字表記した時に非常に多義的な意味を表現していることが分かります。また、「みかぐらうた」「おふでさき」にも「ぢいとてん」「ぢいと天」があります。

■ 「ぢてん」を漢字に表わすと、まず「地天」が思い浮ぶ。そして次に、「辞典」、「自転」、「時点」、「次点」など／＼。そのひらがなのもつ多義の「ぢてん」という言葉を、今流行の横文字スタイルに表わすと表題のように「G-TEN」となるらしい。この「G-TEN」の「G」は「God」(神)と「Globe」(地球)の略称であり、かつまた「Ground」(根源)や「Grammar」(手引)の略称であって、「Gang」や「Gag」の意味であってはならないという。「TEN」は数字の「10」を意味するが、発音に従えば転じて「天」を意味するので、天理の略称であるという。要するに、横文字の表題表記の中に編集のもろもろの想いが込められているわけだ。／＼ 数多い教内出版物の中で、「百という字の意は、白紙に戻り一より始めるを謂う。」と教えられる句を前にして、こういった思いから誕生した「出直し・九十九年目」の素人による編集小冊子が、今から「自転」始めるわけだが、常に「次点」の位置の謙虚さを失わず、歴史的「時点」から教理の幅広い展開を「Guts」(勇断)をもって試み、教理と世上、内と外との「Gap」をうめ「辞典」的役割をもはたす内容の編集が出来ればと希望している。〈たかはし〉 (『G-TEN』1号.P72.「G-TEN雑記帳」)

みかぐらうた第二節 ちよとはなしかみのいふこときいてくれ あしきのことはいはんでな
このよのぢいとてんとをかたどりて ふうふをこしらへきたるでな これハこのよのはじめだし

おふでさき 十号54. このよふのぢいと天とハぢつのをや それよりでけたにんけんである

「元の理」研究

「シリーズ『元の理』研究」では、研究のベースになる「元の理」を『天理教教典』「第三章.元の理」の文を使っています。『天理教教典』は「教規の定めるところに従って天理教の教義として示されたものであり、その意味で、規準とすべき正統的教説であって、天理教教会本部がその権威と責任において提示する組織づけられた教えの大綱」(『天理教事典第三版』P297)であり、「元の理」研究に『天理教教典』のその部分を使うのは当然ということになります。しかし、ここに問題はないのでしょうか。

シリーズ「元の理」研究について

今号よりシリーズで連載する「元の理」研究は、昭和58(※1983)年10月に、開催されたシンポジウム「「元の理」の世界的展開」および、昭和59年1月より毎月、実施されている多元シンポジウム「21世紀に向かう宗教」での講演のなかで、「元の理」を、それぞれの分野から考察した講演に加筆、訂正した論文、さらに関連の研究をまとめ、テーマごとに構成、掲載していくものです。

「元の理」は、天理教教理の根幹であるばかりでなく、人間をつくられた親神の意思と守護、そして、救われるべき人間の姿が開示されているという点で、現代から未来につながる世界を考えるうえに、**人類にとって共有の“こふき”**であると確信します。

したがって「元の理」にこめられた神の思いを、われわれ人間の側から考察する場合、より広くて深い学究的な洞察と、真しな信仰的姿勢の二つが求められなければなりません。つまり「元の理」を構成している人間観、救済観、世界観、神観、宇宙論といったものは、さまざまな視点、角度、分野から多様な側面を求められなければならないだろうという意味で、常に開かれていることが必要だろうと思われまます。全ての思想や学問、信仰は「元の理」から始まり、「元の理」に帰るという前提に立つならば、元一日に帰るということは全てにおいて究極的に「元の理」に帰るといことであると思えます。このシリーズは、これらの考え方を基に、多面的に「元の理」を捉え、そして、人間それ自身のものとするためのひとつのアプローチと考えています。(『G-TEN』1号P53. 編集部)

元の理 / (1) 原典の用語。元になる事柄、拠り所とすべき真実という意味である。「元」には、起源的・歴史的根拠と、原理的・教理的根拠があるので、この両面について教えられている。「元の理」は、「おふでさき」では、簡略形で「もと(元)」、「ほんもと(本元)」と言われる。ー以下略ー

(2) 「元の理」は、『天理教教典』第3章「元の理」に由来する用語として、一般に「元初まりの話」を指して言うことが多い。教理の拠り所とすべき**真実、根源の真理は、[元初まりの話]として表現されている**からである。「おふでさき」に、/月日にわせかいちうをみはたせど もとはじまりをしりたものなし/このもとをどふぞせかいへをしへたさ そこで月日があらわれてゝた(ふ13:30-31) /と示されているように、**「元の理」(元初まりの話)は、親神が、世界中の人間を救済するために、人間創造の元にたちかえつて、今まで明かされていなかった根元的な真実を教えられたもの**である。この説話を通して、親神の守護の根拠が明かされている。この中には、天理教の根本教義が集約されており、元なる親の真実(ふ9:25-32参照)、「つとめ」の意義(ふ6:5-8, 29-30参照)、「教祖(おやさま)魂のいんねん・やしきのいんねん・句刻限の理」(ふ8:21-50参照)などの意味合いが示されている。/ また、/せかいちうどこの人でもをなち事 いつむばかりの心なれとも/これからハ心しいがりいれかへて よふきづくめの心なるよふ /月日にわにんけんはじめかけたのわ よふきゆさんがみたいゆへから/せかいにハこのしんぢつをしらんから みなどこまでもいつむはかりで(ふ14:23-26) /ともあるように、元の理の深い理解が、「陽気ぐらし」を目指す人類の救済に重要な意味をもつことが教えられている。(『天理教事典』P936)

この世の元初りは、どろ海であつた。／ **月日親神**は、この混沌たる様を味気なく思召し、人間を造り、その**陽気ぐらし**をするのを見て、ともに楽しもうと思いつかれた。そこで、どろ海中を見澄されると、沢山の**どちよ**の中に、**うをとみ**とが混つている。夫婦の雛型にしようと、先ずこれを引き寄せ、その一すじ心なるを見澄ました上、最初に産みおろす**子数の年限**が経つたなら、宿し込みのいんねんある元のやしきに連れ帰り、**神として拝をさせようと約束**し、承知をさせて貰い受けられた。

続いて、乾の方から**しやち**を、巽の方から**かめ**を呼び寄せ、これ又、承知をさせて貰い受け、食べてその心味を試し、その性を見定めて、これ等を男一の道具、及び、骨つぱりの道具、又、女一の道具、及び、皮つなぎの道具とし、夫々をうをとみに仕込み、男、女の雛型と定められた。**いざなぎのみこと** **いざなみのみこと**とは、この男雛型・種、女雛型・苗代の理に授けられた神名であり、**月よみのみこと**と**くにさづちのみこと**とは、夫々、この道具の理に授けられた神名である。

更に、東の方から**うなぎ**を、坤の方から**かれい**を、西の方から**くろぐつな**を、艮の方から**ふぐ**を、次々と引き寄せ、これにもまた、承知をさせて貰い受け、食べてその心味を試された。そして夫々、飲み食い出入り、息吹き分け、引き出し、切る道具と定め、その理に、**くもよみのみこと** **かしこねのみこと** **をふとのべのみこと** **たいしよく天のみこと**との神名を授けられた。／かくて、雛型と道具が定り、いよいよここに、人間を創造されることとなつた。そこで先ず、親神は、どろ海中のどちよを皆食べて、その心根を味い、これを人間のたねとされた。そして、**月様**は、**いざなぎのみこと**の体内に、**日様**は、**いざなみのみこと**の体内に入り込んで、人間創造の守護を教え、三日三夜の間、**九億九万九千九百九十九人の子数**を、いざなみのみことの胎内に宿し込まれた。それから、いざなみのみことは、その場所に三年三月留り、やがて、七十五日かかつて、子数のすべてを産みおろされた。

最初に産みおろされたものは、一様に五分であつたが、五分五分と成人して、九十九年経つて三寸になつた時、皆出直してしまい、父親なるいざなぎのみことも、身を隠された。しかし、一度教えられた守護により、いざなみのみことは、更に元の子数を宿し込み、十月経つて、これを産みおろされたが、このものも、五分から生れ、九十九年経つて三寸五分まで成人して、皆**出直した**。そこで又、三度目の宿し込みをなされたが、このものも、五分から生れ、九十九年経つて四寸まで成人した。その時、母親なるいざなみのみことは、「これまでに成人すれば、いずれ五尺の人間になるであろう」と仰せられ、につこり笑うて身を隠された。そして、子等も、その後を慕うて残らず**出直して**しもうた。／その後、人間は、虫、鳥、畜類などと、**八千八度の生れ更り**を経て、又もや皆出直し、最後に、**めざる**が一匹だけ残つた。この胎に、男五人女五人の十人ずつの人間が宿り、五分から生れ、五分五分と成人して八寸になつた時、親神の守護によつて、どろ海の中に高低が出来かけ、一尺八寸に成人した時、海山も天地も日月も、漸く区別出来るように、かたまりかけてきた。そして、人間は、一尺八寸 から三尺になるまでは、一胎に男一人女一人の二人ずつ生れ、三尺に成人した時、ものを言い始め、一胎に一人ずつ生れるようになった。次いで、五尺になつた時、海山も天地も世界も皆出来て、人間は陸上の生活をするようになった。／この間、**九億九万年は水中の住居、六千年は智慧の仕込み、三千九百九十九年は文字の仕込み**と仰せられる。(『天理教教典』「第三章.元の理」P25～29)

『教典』第三章元の理には原典以外のものが入っている

『教典』は三原典に基づいて編述してあるとその冒頭にあります。しかし、実際そうになっているかはあやしいものですが、「元の理」の部分について、西山氏は「三原典以外のものも用いられて」と記しています。それは泥海古記とかこふき話と呼ばれるもので、それらがどうゆう基準で採用されたのかは分からないともあります。

本書は、おふでさき、みかぐらうた及びおさしづに基き天理教教会本部に於て編述したもので天理教教規の定めるところにより、これを天理教教典として裁定する / 昭和二十四年十月二十六日 / 真柱 中山正善(『天理教教典』巻頭)

こふき話について、教祖は「それでよい」とは言われなかったということが『こふきの研究』に書かれています。同書には「申し伝えられています」とあるのみで、だれがそう言ったのは書かれていません。「おふでさき」十号にそれらしきことを示すおうたがありますが、十号が書かれたのは明治8年で、こふき話が書かれた明治14年のかなり前です。明治13年に転輪王講社が設立され、その講社設立に関わった秀司、日暮宥貞、まつゑは14, 5年に亡くなり、山澤良治郎も16年に亡くなりました。その良治郎が書いた「和歌体十四年本」(山澤本)が最初のこふき本とされていることが腑に落ちないのです。

- 十号 88. にほんにもこふきをたしかこしらへて
それひろめたらからハマゝなり
95. それゆへにとりつきよりにしいかりと
たのみをくからしよちしていよ
97. にち／＼にとりつぎの人しいかりと
心しづめてはやくかゝれよ

この天理教教典は原典のみに依拠して制定された記念すべき教義書ですが、第三章に関しては多少趣きが違います。つまり三原典以外のものも用いられています。それが昔、泥海古記その他の名称で呼ばれておった書き物で、これらは教祖のお話から発するにせよ、書いたのは側近の人であり、大なり小なり主観が入っており、重点の置き扱が教祖と異なっているかもしれない。それが、教祖がよしといわれなかった原因とも考えられます。しかしここでは、原典に準ずるものとして採用されているわけです。

ところで、歴史的な書き物のうち、教典に採用された部分と、されなかった部分があります。そして概していうと、簡単になっています。では、どういう理由である部分が採用され、ある部分は採用されなかったのか。それについての正確な事情は知りません。(『G-TEN』1号.P62.「『元の理』の研究史概論」西山輝夫)

元来、その最大の問題は、教祖は“こふき”を作れと御命じになった。山澤氏が筆を執ってお目にかけてが、それでよい、とは御受納にはならなかった—と申し伝えられています。その点から考えますと、仮令、良助筆十四年本が探ね得た最古の“こふき”話であったにしろ、それが“こふき”話の基準であり、本末の姿であるとは断じ得ないのであります。それは一つの試作とは考えられるが、教祖のもとめられる“こふき”であるとは、申し得ないのであります。又、“それでよい”と仰せにならなかつた点が、その何れにあったのかも不明でありますので、お話全体が間違っているのか、部分的に思召に叶わなかつた点があるのか、それも不明なのであります。(『こふきの研究』中山正善. 1957年〈昭和32〉P10)

「おふでさき」の元初まり(元の理)の話

「おふでさき」には「元の理」に関連したおうたが61首あります。そのうち34首が六号です。ここに神名が八つ出ています。この八つは十二号にもあります。この八つに「くにとこたち」「をもたり」はなく、この二つは十六号に出てきます。

「おふでさき」の「元の理」は六号29～54、80～87にまとまって出ています。その中心は29～51で、【註釈】はここをまとめて注釈をつけ、さらに8ページに及ぶ「総註」があります。

総註では、冒頭に「元の親とは月日両神であって、月様はくにとこたちのみこと、日様はおもたりのみこと、と申し上げる」とあります。「月日両神」は註釈にもありますが、月、日の神名は「総註」のみです。この神名は十六号にやっと出て来るものです。

この部分の昭和3年版は、「『どろうみこふき』に就いて大意を記し、以て釈義にかへる事とする」とあって、『泥海古記』の内容が書かれています。「おふでさき」の註釈でありながら、「おふでさき」の内容ではないのです。

3号

15. このよふのにんけんはじめもとの神たれもしりたるものハあるまい
16. どろうみのなかよりしゆごふをしへかけそれがたん／＼さかんなるぞや
17. このたびはたすけ一ぢよをしゑるもこれもない事はしめかけるで
18. いまゝでにない事はじめかけるのわもとこしらゑた神であるから

4号

120. いまゝでハ高い山やとゆうているたにそこにてハしけんばかりを
121. これからわ高山にてもたにそこももとはじまりをゆうてきかする
122. このよふのはぢまりだしハどろうみそのなかよりもどちよばかりや
123. このどちよなにの事やとをもっているこれにんけんのたねであるぞや
124. このものを神がひきあけてしもてだん／＼しゆごふにんけんとなし
125. それよりも神のしゆことゆうものわなみたいいていな事でないぞや
126. このはなし一寸の事やとをもうなよせかい一れつたけたいから
127. にち／＼に神の心のしんぢつわふかいをもわくあるとをもへよ

6号

29. いまゝでにない事ばかりゆいかけてよろづたすけのつとめをしへる

30. このつとめ十人にんぢうそのなかにもとはぢまりのをやがいるなり
31. いざなぎといざなみいとをひきよせてにんげんはぢめしゆごをしゑた
32. このもとハどろうみなかにうをとみとそれひきだしてふう／＼はちめた
33. このよふの元はじまりハどろうみそのなかよりもどちよばかりや
34. そのなかにうをとみいとがまちりいるよくみすませばにんけんのかを
35. それをみてをもいついたハしんぢつの月日の心ばかりなるそや
36. このものにどふくをよせてたん／＼としゆごふをしゑた事であるなら
37. このどふくくにさづちいと月よみとこれみのうちゑしこみたるなら
38. くもよみとかしこねへとをふとのべたいしよく天とよせた事なら
39. それからハたしかせかいを初よと神のそふだんしまりついたり
40. これからわ神のしゆごとゆうものハなみたいいていな事でないぞや
41. いまゝでにない事ばかりはちめるわなにをゆうのもむつかしき事
42. このよふをはちめかけたるしんぢつをたれかしりたるものハあるまい
43. これからハとのよな事もたん／＼とゆうてきかするうそとをもうな
44. にんけんをはぢめかけたハうをとみとこれなわしろとたねにはじめて

45. このものに月日たいない入りこんで
たん／＼しゅごをしゑこんで
46. このこかす九をく九まんに九せん人
九百九十に九人なるそや
47. この人を三か三よさにやとしこみ
三ねん三月とまりていた
48. それよりもむまれたしたハ五分からや
五分五分としてせへちんをした
49. このものに一どをしゑたこのしゅごふ
をなぢたいない三どやどいた
50. このよふのしんじつの神月日なり
あとなるわみなとぶくなるそや
51. にんけんをはぢめよふとてたん／＼と
よせてつこふたこれに神なを
52. いざなぎといさなみいとが一の神
これてしよこの大じんくゝなり
53. またさきハなにかたん／＼とくけれど
いまゝてしらん事ばかりやで
54. このさきハなにをゆうてもにんけんを
はぢめかけたる事ばかりやで
80. このよふわどろうみなかの事なるし
なかに月日がいたるまでなり
81. 月日よりしんぢつをもいついたるわ
なんとせかいをはぢめかけたら
82. ないせかいはぢめかけるハむつかしい
なんととぶくをみたすもよふを
83. みすませばなかにどちよもうをみいも
ほかなるものもみへてあるなり
84. そのものをみなひきよせてたんぢやい
にんけんしゅごはぢめかけたら

85. ないせかいはぢめよふとてこの月日
たん／＼心つくしたるゆへ
86. このみちをしりたるものハさらになし
月日ざんねんなんとをもうぞ
87. こらほどにをもてはじめたこのせかい
月日の心なんとざんねん
11号
69. このよふのはじまりたしハやまとにて
やまべこふりのしよやしきなり
70. そのうちになかやまうぢとゆうやしき
にんけんはじめとぶくみへるで
71. このとぶくいざなぎいゝといざなみと
くにさづちいと月よみとなり
12号
142. このやしきにんけんはじめとぶくハな
いざなぎいゝといざなみとなり
143. 月よみとくにさづちいとくもよみと
かしこねへとが一のとぶぐや
144. それよりもをふとのべへとゆうのハな
これわりゆけの一のどぶくや
145. つきなるハたいしよく天とゆうのハな
これわせかいはさみなるぞや
14号
23. せかいぢうどこの人でもをなぢ事
いつむばかりの心なれとも
24. これからハ心しいかりいれかへて
よふきづくめの心なるよふ
25. 月日にわにんけんはじめかけたのわ
よふきゆさんがみたいゆへから

26. せかいはこのしんぢつをしらんから
みなどこまでもいつむはかりで
16号
3. このもとハかぐらいよにんつとめハな
これがしんぢつこのよはしまり
4. このたひのかぐらとゆうハにんけんを
はじめかけたるをやであるぞや
12. しかときけこのもとなるとゆうのハな
くにとこたちにをもちたりさまや
13. こをかたどろみづなかをみすまして
うをとみいとをそばいひきよせ

六号50. 「神月日」はこのみ

六号50のおうたに「神月日」とあります。
「おふでさき」に「神」は216例、「月日」は
365例あるのですが、一つのおうたの中に
一緒に出て来るのは、このみです。なぜ、
このおうたは書かれたのでしょうか。

「元の理」が出ている「おふでさき」の註一「神」を「月」「日」と分解し、二神とする一月日両神

29～51で「神」を示す言葉は45。このものに**月日**たいない入りこんで たん／＼しゆごをしゑこんだでと、50の〈しんじつの神月日なり〉のみです。六号では50のおうたまで「神」「月日」が併用されています。この二つの言葉は「説話者としての『神』」を示す同一のものだと思われませんが、これを【註釈】は月日両神とし、『教典』「元の理」にある月様、日様を指すように解釈しています。

【現行版註釈 六号】

二九一五一、今までにない事ばかりを言い聞かせて、よろづたすけのよふきづとめを教える、このかぐらづとめの十人のつとめ人衆の中には、元創めた親神である月日両神の理を受けたものもいる。この**月日両神**が陽気ぐらしを見たい上から、人間世界創造を発意し、いざなぎのみこと、いざなみのみこと、を引き寄せて人間創造の守護を教えたのである。その元はと言えば、泥海の中に、うをとみとがいた。それを引き出し夫婦を始めたのである。抑々(※そもそも)この世の元初まりは泥の海で、その中にどじょうばかりが泳いでいた。その中にうをとみとが混っていて、よく見澄ますと人間の顔をしている。それを見て思いついたのは月日の心ばかりである。即ち、月日の思うには、

「このものに、道具を寄せてだんだんと親神が守護を教えた事ならば、さぞ立派な人間が出来よう。」と。そこで、月よみのみこと、くにさづちのみことを引き寄せ、それぞれ種苗代の身の内に仕込んで、男女の性能並びに骨突っ張り、皮つなぎの道具とし、くもよみのみこと、かしこぬのみこと、をふとのべのみこと、たいしよく天のみことを引き寄せて、それぞれ、飲み食い出入り、息吹き分け、引き出し、切る事の道具としたならば、これでいよいよこの世人間の創造に着手出来ようと、**月日両神**の相談定まって、いよいよ人間創造に取り掛かったのであるが、それから後の親神の守護というものは、実に並々ならぬものであった。何と言っても、今までにない人間創造であるから、その困難は並一通りではなかった。この親神の人類創造並びに生成発展守護の真実を、今までだれ一人知った者はないが、この度これをば詳しく言うて聞かせるから、どのように耳新しい事があっても、疑う心を持たず、しっかり聞くがよい。

人間創造の元はうをとみとであって、これを種苗代の道具とし、その体内に月日が入り込んで守護を教えたのである。

即ち、元のちばで親神が、いざなぎのみことと、いざなみのみこと、を夫婦雛型として九億九万九千九百九十九人の子種を三日三夜に宿し込み、三年三月とどまった上で、五分から生まれ出し、五分々々と成人した。そして、一度教えた守護で同じ胎内に三度宿って、再生成育し更に再生に再生を重ねて五尺の人間と成った。

人間創造の元の親神は月日であって、その他のものは皆道具である。月日が道具を寄せて人間創造の守護を教え、この創造の功能、守護の理にそれぞれ神名を授けたのである。

「月様はくにとこたちのみこと、日様はおもたりのみこと」と明記する総註

29～51にはさらに「総註」が付けられています。こちらには「元の親とは月日両神であって、月様はくにとこたちのみこと、日様はおもたりのみこと、と申し上げる」とあります。この二つの神名は「おふでさき」では十六号に出て来るものなのですが、六号の【註釈】に取り入れられています。「こふき本」の「和歌体14年本」、「16年榊井本」及び『泥海古記』(大正14年)が冒頭にくにとこ、おもたりの二神が出て来るのに倣ったものでしょうか。

【現行版註釈 六号】

二九—五一、総註 元の親とは月日両神であって、月様はくにとこたちのみこと、日様はおもたりのみこと、と申し上げる。ここにつとめと仰せられているのは、かぐらづとめの事であって、これはかんろだいをめぐって十柱の神名の役割を勤める十人のつとめ人衆によって勤める。(第一号10註参照) / 第31のお歌以下、かぐらづとめの理を明らかにし、親神様のこの世人間創造の御苦心をお教え下さるために、元初まりのお話を詳しくお説き下されている。 / このお話は、親神様の御神意を詩的な表現でお諭し下されているのであるから、我々は形而下的な理解にとどまる事なく、心眼を開いて、このお話の奥底に示された親神様の人間御創造の真実を悟り、たすけ一条の親心を了解させて頂くべきである。(詩的表現については、第一号21歌の理参照。) / この世の元初まりは泥の海で、その中には月日両神がおいでになったばかりである。或る時月日両神が、「我々両神だけでは何の楽しみもない故、世界を造り人間をこしらえて、その陽気ぐらしをするのを見て、月日も共に楽しもう。」 / と、御相談なされた。

—中略(「元の理」の話が出ている)—

ここに約束の子数の年限到来して、天保九年十月二十六日、この世人間を御創造下された元の親神天理王命様が元のちばに天降られ、教祖様を月日のやしろとして、そのお口を通して今一步という最後の仕込み、即ち世界一列たすけのだめの教をお説き下さる事となった。 / 即ち、天理王命様とは、万物を摂理し給う月日両神、即ちこの世人間を創造し給い、守護し給う元の親神様であって、この親神様の御守護の御理の一つ一つに神名をつけて、十柱の神名をお教え下されている。十柱の神名とは、 / くにとこたちのみこと、をもたりのみこと、くにさづちのみこと、月よみのみこと、くもよみのみこと、かしこねのみこと、たいしよく天のみこと、をふとのべのみこと、いざなぎのみこと、いざなみのみことである。 / まことに天理王命様は、全宇宙を創造し、全宇宙を身体として、普くひろく実在し守護し給う元の親、実の神であって、この世に於ては、教祖様を神のやしろとして元なるちばに直き直き現れ給う神様である。即ち、天理王命様の神名はちば末代の理に授けられ教祖様は生きて永(※とこし)えにちばに留まり給う。これを、教祖存命の理と言う。まことに、元なるちばこそは天理王命様の現れ給う所、たすけ一条の根元であり、本教信仰の生命である。

註 本教に於ては、創世説の事をば『どろうみこふき』と称してゐる。即ち三一より五一に到る二十一首のお歌は、『どろうみこふき』に關することであつて、元々無い人間無い世界が如何にして出来たかといふことに就いて、親神様の創業を物語られたものである。今以下二十一首のお歌を一々解説する代りに、『どろうみこふき』に就いて大意を記し、以て釈義にかへる事とする。

此の世の中は元々泥海であり其の中に月日両神が居られたのであつた。處が其の月日両神が『我々両神だけでは何のたのしみも無い故、世界を造り人間を造つて、其の人間に陽氣暮しをさせ、夫を見て月日も共に楽しもう』と御談合があつた。／そこで月日両神は人間の種苗代とすべき伊弉諾命、伊弉冊命に先づ、人間創造に就ての相談を遊ばされ、次に種々の守護をなすべき其他の神々を順次に見出された。即ち皮継ぎの守護をなす神様として國狭土命、骨突張りの守護をなす神様として月讀命、飲み食ひ出入りの守護をなす神様として雲讀命（又の名豊斟淳命）、息吹分けの守護をなす神様として惶根命、縁切りの守護をなす神様として大食天命（又の名大日靈命）、引き出しの守護をなす神様として大苦邊命、以上世界人間創造上に於て種々の守護を分担す可き神々に對して、月日両神は、「我々両神の世界創め人間創めの大業を助けて呉れるならば、最初生み下した人間の子數に相當する年數を経た後は、創造の元なるぢばに於て神として敬はしめ、且つ其の陽氣暮しを見て共に楽しませやう」と仰せられ、此處に愈々神々協議の下に、世界人間創造の大業に着手さるゝことゝなつた。／却説 伊弉諾命と伊弉冊命とを夫婦の雛型とし、月日両神の御心盡しにて人間創造に着手されたが、其の初めて伊弉冊命の胎内に人間を宿し込まれた場所は今のぢばで、三日三夜の間には總數九億九萬九千九百九十九人の子數を宿された。それより伊弉冊命は三年三ヶ月の間ぢばに止り給ひ、愈々臨月來りて之を今の奈良初瀬七里の間に七日かゝつて産み下し、残る大和を四日かゝり、次に山城伊賀河内の三ヶ國へ十九日かゝつて産み下され、残る日本全國を四十五日かゝつて産み下し給ふた。此初産に生れた人間は身長五分で、其後だん／＼大きくなり、九十九年目には三寸まで成長して皆死んで了つた。此處に於てか伊弉冊命は更に元の子數をば胎内に宿し込まれ、之を産み下し給ふたが、此の人間も身長五分から生れて、九十九年目に三寸五分まで成長して皆死に絶えた。其後又々伊弉冊命は元の子數をば胎内に宿し込まれ、三度目に生み下された人間は、五分より九十九年目には四寸にまで成長したが、其の時伊弉冊命は之を見て「此處まで成長すれば追々五尺の人間になる」と仰せられた。／それより後、尚神々の御守護により、人間は魚虫鳥畜と八千八度生れ代つた。それ故に人間は何の真似も出来るのである。斯くて最後に進化したのが猿であつて、此の猿の胎内に男五人女五人都合十人の人間が生れた。此の人間が五分から生れて次第に成長して、八寸まで成長した時、泥水に高低が出来かけ、尚一尺八寸まで成長した、天地水陸の區別が生じた。其後男一人女一人と二人づゝ生れて三尺まで成長した時、言葉を語り始めた。五尺に成長した時、總數九億九萬九千九百九十九人の中、大和の國に産み下されたる人間は日本の地に止まり、其他の國々にて産み下されたる人間は食を求めて唐天笠(ママ)即ち諸外國へ行つた。

因に神々によつて人間が創造されてより、天保九年（御教祖に御憑りあつた年）に到るまでの年限は、九億九萬九千九百九十九年で、最初伊弉冊命の胎内に宿つた九億九萬九千九百九十九人の子數と正に同一である。其の内、九億九萬年は水中の住居、六千年は智慧の仕込、三千九百九十九年は學問の仕込みであつた。／斯様にして親神様がだん／＼人間を仕込んで下され、十中八九まで仕上げ下さつたのであるが、今一步といふ所が仕込めてなかつた。爰に約束の年限が到来して、世界人間を創造なし下された元の親神様が、元なるぢばに天降られ、御教祖の身体に入り込み其の御口を通じて、今一步といふ最後の仕込（だめのをしへ）をなし下さることになつたのである。14

『泥海古記』、及び「和歌体14年本」の冒頭部分

両書の冒頭は月様、日様の二神が居たところから始まっています。これは「六号30. このつとめ十人にんぢうそのなかに **もとはぢまりのをやがいる**なり / 31. いざなぎといざなみいとをひきよせてにんげんはぢめしゆごをしゑた」をどう解釈するかという問題でもあります。

和歌體十四年本(山澤本・三七)内容

- 1、このよふ此世ハほんもと本元なるハどろのうみ泥海 もとなるかみ元神ハ月日さま様なり
- 2、それよりも月さま様まさき先多く國床にとこを 見定みさ見めつ定けて日さま様にだんじ談
- 3、それゆへ故にく此にとこ神たちのみこと様さま 此のかみ神さま様ハもとのを元親やなり
- 4、これからにせかい世界こしら拵ゑ拵にんげん人間を 拵こしらへ拵よふとそふ相談だんき談まり
- 5、にんげん人間をこしら拵へるにハそれ道具くの どぶぐしな雑がた型みだ見出すもよふ模様を様

「天輪王(てんりおう)」

大正14年に初版が出た『泥海古記』には神名として「天輪王」が使われています。ルビこそ「てんりおう」になっていますが、驚きです。

和歌体十四年本には「おもたり」は出てきません。同書は「明治十四年三月記之」とあるので、十六号が同14年4月からなので出てこないという解釈ができますが、では「くにとこたち」はなぜ出ているのかという疑問が発生します。

『泥海古記』に「尾一つ」「尾三つ」とあるのは、「16年本(榊井本)」の記述に依っているようです。これは今のかぐらづとめの形に取り入れられています。

等を助け下さるごいふに付きみきより神一條の咄し人間元始りしん
 じつの道理を論し其の説論通り疑心なく人道を守る心を戒て謹むな
 らば不思議と病氣全快するがゆへに追々傳へ來て數多の人々が參詣
 するに付き以前の役人より藤堂殿へ言上して則ち京都吉田神祇所よ
 り參詣所を差許しと相成しよし夫天輪王尊と云ふは月日と八柱の神
 を一度に稱名するなり。
 中山みきの魂心天理にかのふたるを以ての事なれども人間に神名
 を授る事ならざるゆへに此の屋敷地面は元始りの泥海なるゆへに地
 名に**天輪王**の尊と授け下さるなり。

神の御古記

此の世の元なるは月日と云ふもなく人間もなく世界もなく只泥海
 ばかりなり。其の中に獨化の神二神あり、これ今日の月様日様これ
 なり月さいふは國常立尊なり御姿は頭一つ尾一つの大龍王にして泥
 海中よりあらはれまして國床を見定め給ふ故に國常立の尊といふ理
 なり又日さいふは面足之尊と申すなり、御姿は頭十二尾三つあり三
 つの劍ある大蛇神なり則ち此の二神曰くには泥海中にてゐるばかり
 では、たれが神と云ふて敬ひする者もなく氣のいずみある事なり、
 故に爰に人間といふ者を拵らへ其の上に世界を始めて人間に神がい

「十六年(榊井本)」の記述はかぐらづとめに取り入れられている

右の図で「……」が尾で、他の腕に結ばれています。また、月様、日様は根元神格ということで、常にその役割を月一真柱、日一その妻が担っています。日様、月様を別格にすることによって、「かぐらづとめ」の役割に格差がつけられているのです。

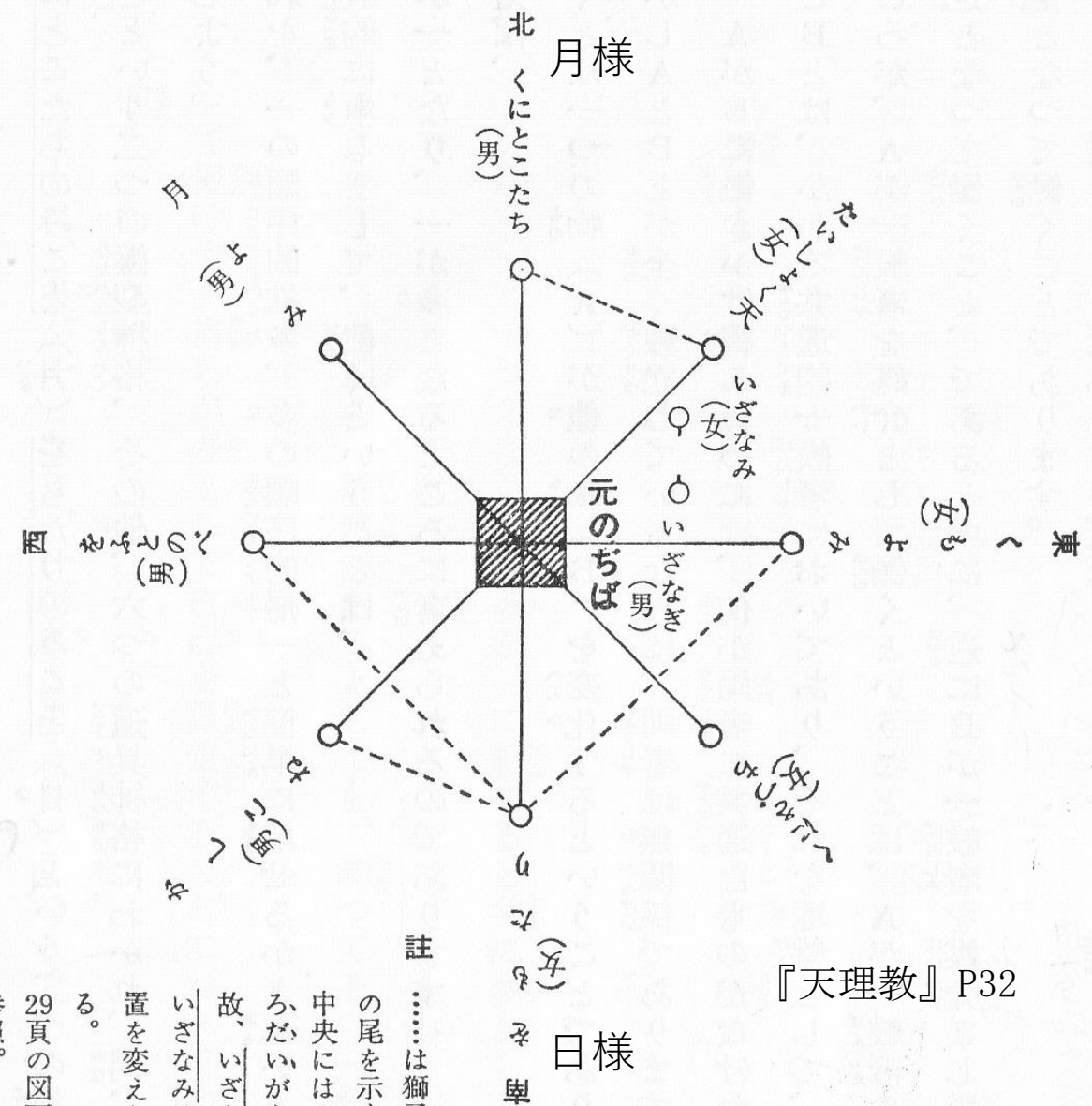
くにとこたちのみことの尾は、たいしよく天のみことの右腕に、又、をもたりのみことの三つの尾は、をふとのべのみこと、かしこねのみことの右腕、及びくもよみのみことの左腕に結ばれる。いざなぎのみこと、いざなみのみこと、月よみのみこと、くにさづちのみことは独立していられるように見えますが、これは人間創造の際、くにとこたちのみこと、をもたりみことと最も関連が深く、特にこの六柱を六台はじまりと申すのでありますから、殊更に、くにとこたちのみこと、をもたりのみことと結ばれるまでもないためでありましょう。この意味から、十柱の神は十の別々の神格ではなく、その理において一つであるといつてよいでしょう。即ち、多にして一なる神であり、決して多神ではないのであります。而して、十柱の神名を詳しく申しますと、くにとこたちのみこと(月)をもたりのみこと(日)という二つの根元神格、いざなぎのみこと、いざなみのみことという二つの雛型神格、その他、六つの道具神格にわかれ、同じく神名といつても順序があることがわかりましょう。(『天理教』P32. 深谷忠政. 1964)

かぐら
※現在真柱が体調不調のため、後継者が代務

- | | |
|--------|--------|
| 中乾巽東北 | 中乾巽東北 |
| 宮東武田大 | 宮東武田大 |
| 森井谷中亮 | 森井谷中亮 |
| 与光は益 | 与光は益 |
| 一郎則よ子様 | 一郎則よ子様 |
| 中良坤西南 | 中良坤西南 |
| 宮西田土真 | 宮西田土真 |
| 森田中佐柱 | 森田中佐柱 |
| み恵信忠奥 | み恵信忠奥 |
| よ美子行雄様 | よ美子行雄様 |

2024.10神楽役割
「みちのとも」12月号

かぐらづとめの人衆配位置図



註
……は獅子面の尾を示す。中央にはかんふだいがある故、いざなぎいざなみは位置を変えられる。
29頁の図面を参照。

『天理教』P32

「十六年(榊井本)」

深谷氏が『天理教』に「くにとこたちのみことの尾は、たいしよく天のみことの右腕に、又、をもたりのみことの三つの尾は、をふとのべのみこと、かしこねのみことの右腕、及びくもよみのみことの左腕に結ばれる」と書く根拠は、「十六年(榊井本)」に依っています。

すなわち、現在のかぐらづとめのやり方は、「十六年(榊井本)」の記述をもとに、さらに他の神々との関係が付け加えられたものです。

くにとこたちの命わ、天にてわ月様なり。この神わ男神にして、おんすが
 たわ、かしら壹つ、おふわひとすじののたいりやうなり。このせかい、國と
 こをみさためたもふ。このりをもつてくにとたちの命と、ゆう。また國をみ
 上 さいめたもふゆゑに國みさゝめの命とゆう。人間をやとしこみたもふとときに、
 かみよりつくがゆゑに月様とゆふうなり。月様がさきにたゆゑに日月とわい
 われづ、月日とゆう。三十日をまた一月とゆう。ぶつぽふにてわ、しやかに
 如 来 現 ぶつぽふをさつけたもふ。また、さきにいでゝほふをは
 じめたもふにて、ぜんじゆう、様とゆう。人間みのうちめのうるをいのしゆう
 護 ぶの神様なり。則めわこの神様のかりものなり。
 おもたりの命様わ、てんにてわ日輪様、この神わ女神、御すがたわかしら
 十二の三すじのおふに三つのけんある大じやなり。この神様わ人間やとしこ
 みたもふ後わ、日々にみがおもくなるゆゑに、おもたの命とゆう。日々にり
 をますゆに日輪様とゆう。をふに三つのつるきあるゆゑに、このりをあきな
 女わじやけんといまにてもゆうなり。かしら十二ある壹つのかしらにて、十
 二月のあいた、壹月づゝかしらかわりてしゆうごを事。日にかわりてしゆ
 うこう。又、十二時つゝかしらかわりて、目を壹時とすしゆうごうあるゆゑ
 に壹ヶ年を十二月とさゝめ、壹日を十二ときとゆう。十二支のほふかしらを
 とりまきかりてしゆうごうあり。このりをもつて十二支とゆうなり。ぶつぽ

取 巻 ありてしゆうごうあり。このりをもつて十二支とゆうなり。ぶつぽ
 護 ぶの神様なり。則めわこの神様のかりものなり。
 おもたりの命様わ、てんにてわ日輪様、この神わ女神、御すがたわかしら
 十二の三すじのおふに三つのけんある大じやなり。この神様わ人間やとしこ
 みたもふ後わ、日々にみがおもくなるゆゑに、おもたの命とゆう。日々にり
 をますゆに日輪様とゆう。をふに三つのつるきあるゆゑに、このりをあきな
 女わじやけんといまにてもゆうなり。かしら十二ある壹つのかしらにて、十
 二月のあいた、壹月づゝかしらかわりてしゆうごを事。日にかわりてしゆ
 うこう。又、十二時つゝかしらかわりて、目を壹時とすしゆうごうあるゆゑ
 に壹ヶ年を十二月とさゝめ、壹日を十二ときとゆう。十二支のほふかしらを
 とりまきかりてしゆうごうあり。このりをもつて十二支とゆうなり。ぶつぽ

『天理教教典』は「神」について、第三章「元の理」と第四章「天理王命」で矛盾している

「元の理」が月日親神を月様、日様と分けているところから、六—50の解釈は、くにとこたち、をもたりが月日親神であつて、残りの八つの守護は道具であるとなります。ところが、第四章では、くにとこたち、をもたりも含む十の守護という説明になっています。こちらは、親神は月様、日様とは別に存在していて、「月様—くにとこたち」「日様—おもたり」も他の8神と同格です。第三章と第四章の説明は異なっているのです。

『天理教教典』第三章「元の理」〈P30.1行目よりP31.2行目〉
く「元の理」の話の後／ 月日よりたん／＼心つくしきり そのゆへなるのにんけんである 六 88
このよふのしんぢつの神月日なり あとなるわみなどふくなるそや 六 50
にんけんをはぢめよふとてたん／＼とよせてつこふたこれに神なを 六 51
この世の元の神・実の神は、月日親神であつて、月様を、くにとこたちのみこと 日様を、をもたりのみことと称える。あとなるは皆、**雛型であり、道具**である。更に申せば、親神は、深い思召の上から、その十全の守護を解りやすく詳しく示し、その夫々に神名をつけられたのである。／ しかときけこのもとなるとゆうのhana くにとこたちにをもたりさまや 一六 12

『天理教教典』第四章「天理王命」〈P38.1行目よりP39.12行目〉
親神は、元初りに当り、親しく、道具、雛型に入り込み、十全の守護をもつて、この世人間を造り、恆にかわることなく、身の内一切を貸して、その自由を守護し、又、生活の資料として、立毛をはじめとし、万一切を恵まれている。
その守護の理は、これに、神名を配して、説きわけられている。
くにとこたちのみこと 人間身の内の眼うるおい、世界では水の守護の理
をもたりのみこと 人間身の内のぬくみ、世界では火の守護の理。
くにさづちのみこと 人間身の内の女一の道具、皮つなぎ、世界では万つなぎの守護の理。
月よみのみこと 人間身の内の男一の道具、骨つっぱり、世界では万つppりの守護の理。
くもよみのみこと 人間身の内の飲み食い出入り、世界では水気上げ下げの守護の理。
かしこねのみこと 人間身の内の息吹き分け、世界では風の守護の理。
たいしよく天のみこと 出産の時、親と子の胎縁を切り、出直の時、息を引きとる世話、世界では切ること一切の守護の理。
をふとのべのみこと 出産の時、親の胎内から子を引き出す世話、世界では引き出し一切の守護の理。
いざなぎのみこと 男雛型・種の理。／ いざなみのみこと 女雛型・苗代の理。
即ち、親神天理王命の、この十全の守護によつて、人間をはじめとし、万物は、皆、その生成を遂げている。

第三章と第四章はどう教えられているかー『一期講師用教典考案』

修養科には『教典』の授業があります。第三章と第四章の異なる親神の説明をどのようにしているのでしょうか。

一期講師用の教本を見ると、第三章の説明で第四章も説明せよという趣旨のようです。第三章と第四章の違いは、天理教の神の性質、一神か多神かという重要な問題を含んでいるのですが、修養科では「元の理＝こふき本＝泥海古記」の説明が採用されているということです。

現在の教会本部のかぐらづとめが、第三章「元の理」の教理に従い、月様、日様を別格にして構成されているため、第四章「天理王命」の十全の守護を同格とする教理は説けない、あるいは説かないのです。

(1) 月日親神様の道具衆 (第三章元の理 第三限 元はじまりの御話によって了解されること)

④ 教典30頁3行目～31頁2行目を修養科生と共に読む。

⑤ この世の真実の神は、月日親神様であり、月様を「くにとこたちのみこと」様、日様を「をもたりのみこと」様と称えるように教えていただいています。

⑥ それ以外の神名は、月日親神様が人間をお造りになったときにお定めくださった雛型と道具の理にお授けくださった神名であり、これらの神名を通じて私たちは親神様の十全のご守護を分らせていただくのです。(『一期講師用教典教案』P95)

(3) 十全の守護 (第四章天理王命 第一限 天理王命の神名とその守護)

⑥ 教典38頁1行目～39頁12行目を修養科生と共に読む。

⑦ 十柱の神名、十全の守護を「第三章 元の理」(25～29頁)の説話と関連づけて説明し、親神様は、元初りにあたり、道具、雛型に入り込み、十全の守護をもってこの世人間を造られた。そしてその守護は、今もなお変わることなく頂戴していることを伝える。

【講義のポイント】／ 十全の守護の説き分けと神名を説明する上で、この世の真実の神は、月様くにとこたちのみこと・日様をもたりのみことであって、後は、道具、雛型である。すなわち、月様日様が、道具衆にお入り込みになって、守護をされ、そして、それぞれに神名をつけて教えられている、という**順序をしっかりと押さえて伝える**。

【参照】このよふのしんぢつの神月日なり あとなるわみなどふくなるそや 六 50

にんけんをはぢめよふとてたん／＼と よせてつこふたこれに神なを 六 51

この世の元の神、実の神は、月日親神であって、月様を、くにとこたちのみこと、日様を、をもたりのみことと称える。あとなるは皆、雛型であり、道具である。更に申せば、親神は、深い思召の上から、その十全の守護を解りやすく詳しく示し、その夫々に神名をつけられたのである。(『教典』30頁)(『一期講師用教典考案』P106)

『天理教教典』「第四章天理王命」が説く神観の根拠—「月日」は「神」の別表現、「『神』『月日』及び『をや』について」

昭和9(1934)年、『日本(やまと)文化』2号に掲載された「『神』『月日』及び『をや』について」は、親神を表す自称詞として、「神」「月日」「をや」の3種類が用いられていることを論じたものです。これは「こうき本」や『泥海古記』の冒頭にあるような親神を月様、日様と二神であるという考え方に一石を投じるものであり、天理教一神教説につながっていき、教典第四章の「親神」になります。

ただ、この考え方は、従來說を否定するわけで、そこに第三章と第四章の違いが出てきます。教典は両方の考え方を取り入れた妥協案なのです。

要言すれば『おふでさき』は、求道者の悟りやすい様に、教祖親しく筆を執られて、順序を立てて書かれたものであって『神』『月日』及び『をや』の名称もその求道者の信仰過程に応じて解し得る様に用ひられたものである。(『「神」「月日」及び「親」について』P66.中山正善.1935.養徳社)

神・月日・をや 「おふでさき」の用語。「おふでさき」は啓示書であるから一人称を用いた発言となっており、話し手である親神を表す自称詞として、「神」「月日」「をや」の3種類が用いられている。その3種の名称は17号「おふでさき」のうち、第6号の半ばまでは「神」、そのあと第14号の初めまでは「月日」、それ以後は「をや」と使い分けられている。ただし第17号は「神」と「月日」である。／ しかも、「神」から「月日」、「月日」から「をや」へと名称を変えられるに際し、

いまよで八月日とゆうてといたれど もふけふからハなまいかゑるで (ふ14：29)
などと仰せられているところに、名称を意図的に使い分けられていることがわかる。

それは教えを聴く人間の側に立って理解しやすいよう、3種類の名称をもって親神を説かれたことを示している。

すなわち、初めは従来から使いなれてきた「神」という言葉によって話されながら、世間普通の神ではなく、この世を始めた「元の神」であり、今も変わることなく人間を守護している「真実の神」であると、言葉をそえて説明された。次に、「月日」という言葉によって、「真実の神」は「月日」であると説かれ、世界をわけへだてなく温みと潤いをもって万物を守護されているのが親神であって、「月日」こそ親神の天に現れた姿であると目に示して教えられた。さらに、「をや」という言葉によって、親神と人間は、親子であると説かれ、人間から親神を見れば何事も打ち明けて、すぐることのできる親身の「をや」であり、親神から人間を見れば可愛い子供であると、身近で親密な関係を教えられた。

このように、親神を「神・月日・をや」と名称を変え、順序を立てて説かれたことは、親神をより深く納得させようと配慮されていることを示している。(『天理教事典第三版』P225)

「十二月廿一日よりはなし」の前は「神」、あとは「月日」

月日の文字の現れてゐるのは第六号からであるが、特にその第五五のお歌から後の方は、言ひ換へれば『十二月廿一日よりはなし』との日付ある所から後は、全然『神』の文字が用ひられては居らず、之に代るに『月日』の文字が用ひられてゐるのである。而して『おふでさき』の前半、即ち明治二年正月より御執筆の第一号から、明治七年十二月廿一日以前に筆を止められてゐる第六号五四のお歌まで用ひられてゐた、説話者としての『神』なる名称は、明治七年十二月廿一日以後は『月日』と書きあらためられてゐる感があるのである。(『「神」「月日」及び「親」について』 P17.中山正善.1935.養徳社)

『「神」「月日」及び「親」について』には、明確に「神」と「月日」の使分けが「おふでさき」には見られ、それは六号54のあとの「十二月廿一日よりはなし」が区切りになっていると書かれています。そして説話者たる「神」の名称が「月日」に書き改められたのだと説明しています。

なぜ、書き改めたのか、それは政府が「天皇家の先祖、または、それに仕えて天皇宗が認めたもののみを神というような神道国教政策をとった」からです。教祖が説く神は、政府が言うところの神とは違うことを示すために、その名称を「月日」に変えたのです。

その区切りは厳密に言えば、50と51の間にあります。50で「神月日」と併記することでそれらが同一であることを示したのです。51, 52の「神」は「どふぐ」に着けられた「神名」であって、「神」ではありません。

明治七年に山村御殿で取調べを受けた際、政府が天皇家の先祖のみを神と宣言して、それからの日本の教育では天皇家の先祖、または、それに仕えて天皇家が認めたもののみを神というような神道国教政策をとったので、教祖は神に従えとか神のいうこと聞いてくれと教えると、天皇宗に服従しろと教えていると勘違いされるというので、神という言葉を使わなくなったのです。／日本人が神を、天皇の先祖と誤ってしまつたら教えを勘違いされてしまう。天皇家に服従することが善ではない、そんなことは教えていないというので月日の理と仰言つたのです。／これが明治七年のことです。(『ほんあづま』 293号P15)

「おふでさき」六号

このものに一どをしゑたこのしゆごふ
をなぢたいない三どやどりた

五+

このよふのしんぢつの神月日なり

五十一

あとなるわみなどふくなるそや
にんけんをはぢめよふとてたんくくと
よせてつこふたこれに神なを

五十二

いざなぎといざなみいとが一の神

五十三

これてしよこの大じんくくなり
またさきハなにかたんくくとくけれど
いまゝてしらん事ばかりやで

五十四

このさきハなにをゆうてもにんけんを
はぢめかけたる事ばかりやで

五十五

十二月廿一日よりはなし

このよふをはぢめだしたるやしきなり
にんけんはじめもとのをやなり

「神」、「月日」、「おや」と表現を変えた理由

『「神」「月日」及び「親」について』では「求道者の信仰過程に応じて解し得る様に用ひられた」という説明になっていますが、これをより具体的に当時の状況をもとに解説したのが八島氏です。教祖が説く神は天皇の神とは違うという意味で「月日」に変え、月や日、星に願を掛けるような月日ではないと「をや」に変えたのだと説いています。

『天理教教典』「第三章元の理」にある「元の理」が教祖が説いた「元始まりの話」足りえるかということは、天理教の神観の問題として捉え直す必要があります。

今まで神と呼んでいたものを簡単に言いますと、尊いものを皆、神と呼んでいたのです。自分の力でどうにもならないような力のあるもの、または尊いものを、みな神と呼んでいました。／ 自然界の真理も、それから自分の女房が自分の言うことを聞かなくて威張っているとお上さんと言うのです。／ そのように、強いもの、怖いもの、それから真理、不動なるもの、それから良くてきていた、出来栄えの良い彫刻も、動き出しそうな鷹ができたと言うと、神妙なる出来と言うのです。神々しい出来とか、良くてきた精巧なるものも、神々しい神と言うように呼んでいたのですが、それが教祖の場合、真理と言うような意味で、慶応年間までに作られたみかぐらうたでは、神と言う言葉を非常に広範囲に使われていたのです。

ところが明治七年に山村御殿に教祖が呼び出されました。その時に、私が教えている神は、天皇の先祖のことではないと言う意味を教祖のほうから言ったから県庁の取調になったのです。／ 日本の明治からの天皇政府は、原則的に天皇並びに天皇の先祖を神と呼ぶ。これを天神と言うのです。／ そして、その天皇に国土を奉った者を、国つ神。天神地祇・八百万の神と呼びまして、それ以外神と呼ばせない。もっと極端に言いますと、古事記・日本書紀と並びまして延喜式の神名帳と言うのを作りました。この神名帳にあるものを神と呼ぶのであって、それ以外を神と呼ばせないと言うのが、明治政府の、神と言う言葉を天神地祇に独占する、思想統制であったのです。／ それを押し付けられました時に、教祖のほうで積極的に私は八紘一字を説き、世界征服を言うような権力者を神とは教えない、考えないと、おふでさきの表現を「月日」の理と改めたのです。／ 夜でも見える月日、現実に見える自然界、言い換えますと、天地日月・森羅万象と言っている自然界の真理を神と言うのだという意思表示が月日の理と言う表現に変わっているのです。

その後秀司さんと山澤さんが、星マンダラを飾りまして、星に願いをかける、月や日に願いをかけると言うような拝み祈禱を教えました時に、月日の理と言う表現をなくしまして「をや」と言う表現に変えたのです。／ その親は、生んで育てて、その後で幸せに暮らしてくれと言う思いまで持つのが親であると言う立場で、おつとめの神とは、神、月日及びをやと言う表現でようやく表されるような、たすけるもようばかり思っている神なのだと言うことです。陽気・調和・喜び・たすけ・真理を神と言えるような考え方です。(『ほんあづま』441号.2005.11月P7.八島英雄)

識者は「元の理」から何を考えたか

ここまで、教典第三章に示された「元の理」は、月日二神+8神という構成になっているのを見てきたのですが、この「元の理」を提示された『G-TEN』に寄稿した識者はどのような意見を示したのでしょうか。『天理教教典』は第三章と第四章の神観が異なっているので、第三章の方をA、第四章の方をBとして表記したいと思います。

天理教者の一般的な解釈

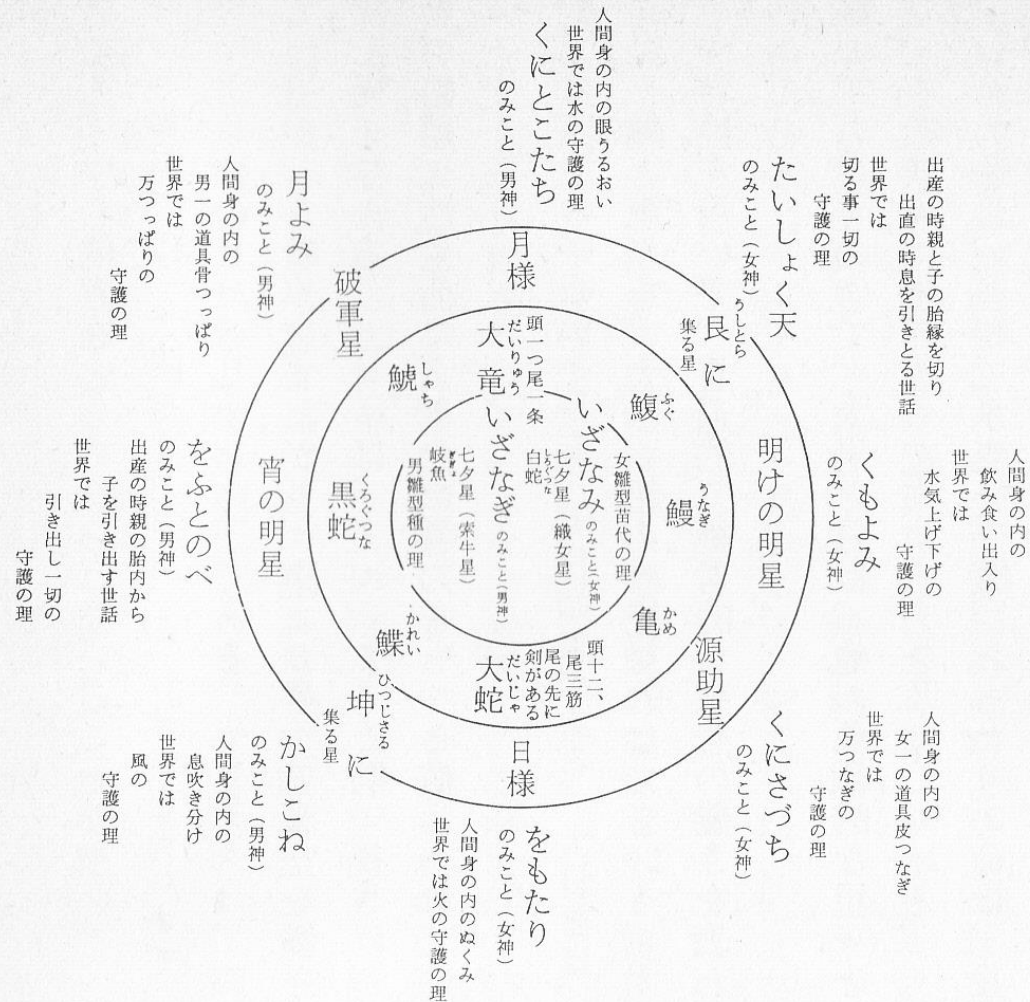
著者の大柳氏は天文を得意とする地学教師で、「こふき話」に書かれた星座の説明をしています。そのために教内ではよく使われる図を提示しています。A説に基づいています。天理高校の教員なのでA説になるのは当然でしょうか。

「こふき」話の中には、人間を創造した二神と道具衆八神に、その守護の理と共に、星の名が与えられている。(図1) 月と日を除いて他の星々は、天文学的には、特に意味があるとは思えないが、すべて昔から庶民に親しまれ、何らかの信仰の対象とされた星ばかりである。明治の中頃でも、空は暗く、庶民にとって星はもっと身近な存在であったに違いない。おそらく、親神様の守護の理をわかりやすく理解し、また、星を見上げて、神の守護に対する感謝の気持ちを忘れないようにとの思いから、つけられたのではないかと思う。ここでは、それぞれの星の伝説や信仰から、十柱の神々の関係を探ってみた。

一、くにとこたちの命とおもたりの命

この二神は、他の八神と根本的に異なり、人間を創造した元の神、実の神の親神である。おふでさきの中にも、親神を月日として表わされている。太陽と月は、最も古くから世界中で信仰の対象とされ、神話や伝説も多く、神々の中でも、中心的存在として祭られていることが多い。(『G-TEN』23号.P64.「十柱の神の星々について」大柳義徳)

図1 十柱の神とその守護



少ない男女両性による人間創造

民族学者の大林太良氏は、「元の理」の人間創造Aを「男女両神が協力し、創造がおこなわれる」とし、記紀神話もそうなので日本では一般的とされているが、世界的に見ると少数派なのだと書いています。至高神が創造するというのが世界には多いそうです。キリスト教もこの例になります。教典第四章(B説)は「親神は、元初りに当り、親しく、道具、雛型に入り込み、十全の守護をもつて、この世人間を造り」とあるので至高神創造説です。ここからキリスト教と天理教の神観は似ていると見方が出てきます。

また、この「元初まりの話」において注目すべき点に、人間を創造する場合に男女両神が協力し、創造がおこなわれる、という点があります。／ この考え方は日本人には一般的です。〈国生み神話〉でもイザナキ、イザナミが交わって国を生み、神を生んでいるように、男神と女神が一緒になって生むというのは、当たり前のことであると思いがちですが、**世界的にはそうではありません。**／ 1981年にアメリカの人類学者でベギー・サンディという女性が“Female power and Male dominance”（女性の力と男性の支配）という興味深い本を出版しています。／ その内容は、世界中から39の民族を選び、それらにおける創造神話を調べたものです。これは重複しないように、そして同じような文化をもつ民族を避けて選ぶというように、世界中の民族あるいは文化というものをある程度代表できるような形で選んだものです。その結果をみますと、性のない創造者、つまり世界あるいは人間を創造した神に性がない、つまり男でも女でもない、という例が二例あります。それから創造主が女性あるいは女性の先祖というのが六例。夫婦の創造主、あるいは夫婦が先祖であるというものが六例。男性の文化英雄、文化英雄というのは人類にさまざまな文化、たとえば火、あるいは農耕をもたらしたというのが文化英雄ですが、男性の文化英雄あるいは男性の先祖というものが九例。それから創造の行為は、動物の創造神あるいはまた動物が人間の先祖であるというのが三例。さらに至高神というか、キリスト教の神のように他と隔絶した高い地位をもっている神が世界を創造した、あるいは人類を創造したというのが十三例あります。／ この至高神は、男として考えられている場合が多いようですが、いずれにしてもベギー・サンディの研究をみてもわかりますように、夫婦が協力して創造する、あるいは夫婦のあいだに生まれてきた子供が人類の初めであるという考え方は、むしろ少ない方だといえるわけです。キリスト教の場合でも、まず創造神が万物を創造するわけです。人間を創造するのも父なる神であり、男性の創造神です。／ しかもこのサンディの研究でおもしろいのは、いわば夫婦型の創造はポリネシアのサモア、メラネシアのなかにあるポリネシアの飛地であるティコピア、東部インドネシアのアロール島民、それから北米のオハマ族、南米のヒバロ族というように、まさに太平洋をとりまく形で夫婦型の創造神話が分布しているという点です。サンディの事例が少ないために、太平洋地域の特徴であると断言するのはむずかしく、もっと多くの事例を調べる必要がありますが、しかし世界的にみてそう多いものではないことは確かです。日本の場合も、そういう分布圏のなかに含めて考えることができるのではないかという意味において、やはり世界における神話からみましても、かなり特徴的なものであると位置づけることができると思います。(『G-TEN』19号.P98.「比較神話学からみた『元の理』について」大林太良) 24

男女合体が 根本原理

高野山真言宗管長を務めた松長有慶氏は、男女合体尊は宇宙の根本原理を象徴的に表したものだと言っています。図1は不鮮明でよく分からないのですが、チベット仏教の歓喜仏はまさに男女合体の姿です。かんろだいの形はそれのさらに局所を拡大したものです。

また、曼荼羅の説明をしています。かぐらづとめの配置は胎蔵曼荼羅中央部の中台八葉院に似ています。

男女合体が根本原理

金剛界・胎蔵の両曼陀羅は七世紀頃に出来たものですが、十一世紀頃に「カーラ・チャクラ」という聖典が成立しました。これはインド文化の最後のほうにできたものです。その「カーラ・チャクラ」の神様を絵にしたものが図1です。／身体が宇宙の根源を示す五色で、男女合体尊になっています。日本人が見ると男女合体の図は卑猥だと思ってしまうのですが、そうではなく、宇宙の根本原理を象徴的に表したものです。ここに古代の須弥山が具体的な身体をもった仏様に変わっているのが分かります。極端に言えば男女合体尊が宇宙の中心となり、まわりの円形が宇宙の動きを表すと同時に世界の現象を表すという考え方になってきました。残念ながらこのような考え方は日本に密教が入ってから、かなり後になってインドで成立した考え方ですので日本には伝わっておりません。インド、チベット密教の中にはこのようなものが残っているのです。

では曼陀羅はどのように使われたのでしょうか。言えることは行者が修行に使ったと考えられます。行者が瞑想中にこの曼陀羅をみつめ、曼陀羅は宇宙そのものを表しているわけですから、その宇宙を自分の中にいれこむために使ったのです。基本原理は、宇宙を自分の中にいれて、そしてまた出してゆくというものです。その間にいろいろなステップがあります。それぞれの流派によって異なりますが、要するに自己と宇宙は本来は一つであると瞑想することが修行の眼目だったのです。東洋の世界観には宇宙と自己が本来的に一体であるとする考えがあるのです。

我々は、大抵の場合、自己が宇宙の中の一部だと考えます。私や花や机等々の存在が寄り集まって宇宙を構成していると考えられるのですが、東洋的世界観は部分の集合が宇宙を形成しているとは考えないのです。部分の一つ一つの中に宇宙全体が現れていると考えるのです。ですから極端に言えば「俺が宇宙だ」「俺が完全体だ」と言えるわけです。しかし実際の具体的な肉体をもった我は、宇宙そのものでもなければ完全体でもありません。本来は完全体であり、宇宙そのものの我がどうして不完全なのか、それは何らかの雲がかかっているだけであり、本体は宇宙であり、完全体だと東洋的な考えは言うのです。（「東洋の宇宙観—宇宙と自己は本来は一体」松長有慶、『G-TEN』57号.P73）

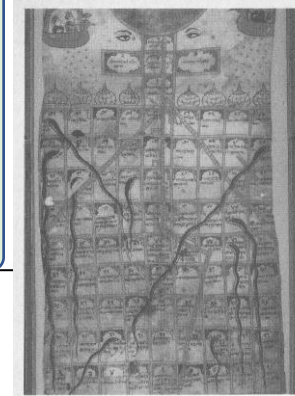


図1 カーラチャクラ

かんろだい



チベット仏教、歓喜仏・忿怒尊
<https://www.abaxjp.com/tibet-buddha/tibet-buddha.html>

「こふき本」 は曼荼羅 の型がある

高野友治氏はこふき話に曼荼羅の型があるのは、明治13年の転輪王講社の時に入ってきた日暮宥貞が持ち込んだのではないかという見解を示しています。日暮宥貞は大変布教がうまかった、そのやり方を持ち込んだのだというわけです。

各先生方の「こふき」を読んでみると、何か右ならえをしたような型があるのだ。どうも「こふき」が書かれる前に、信者たちの間に、話し合いの間に、一つの型をもつ「こふき」が出来ていて、それを各自が筆に書きとめたのでないかと考えられる。

それに、もう一つ重大なことは、これらの「こふき」の組み立てかたであるが、どこか真言密教に見る曼陀羅の型がある。東西南北に神々を配し、十善の神の守護を説く。日月星辰を配置する。鳥畜類、魚類を配置する。そこに天地自然の巡行の哲学がある。そして仏法にてはと人間の世界の真理を明かにしようとしている。これは一つの曼陀羅である。／ このような、曼陀羅形式の表現方法を、それらの先輩先生方が知っていたのであろうか。／ どうも、これらの先生方は農業の人で、真言密教の曼陀羅学を学んだとは考えられない。／ この「こふき」に、この文脈を作ったのは、真言密教の曼陀羅の知をもった人の外に考えられない。／ それでは、この曼陀羅式文脈をつけたのは誰であろうか、まず頭に浮んで来る人は、金剛山地福寺の住職日暮宥貞である。彼は下総国楠ヶ山村の人で、武州西新井村物心寺で得度し、長谷寺に学び、梅心院に住み、のちに金剛山地福寺の住職となった人である。／ この人は、布教伝道に秀れた才能をもっていたようだ。

もともと長谷寺は学問の寺であって、壇家をつくり、壇家との接触で寺を経営する寺ではなかった。布教伝道は十穀聖が日本中をまわり、経営は500石の寺領があり、十穀聖の運ぶものがあり、大名に金を貸していたと噂されるほど金をもっていた。それでも昔からの壇家が何百軒かあった。／ 日暮宥貞は、直接村人に接する仕事をやっていた。壇家まわりをして、仏の功德を説き、仏信仰のしかたも具体的に教えたもののようである。

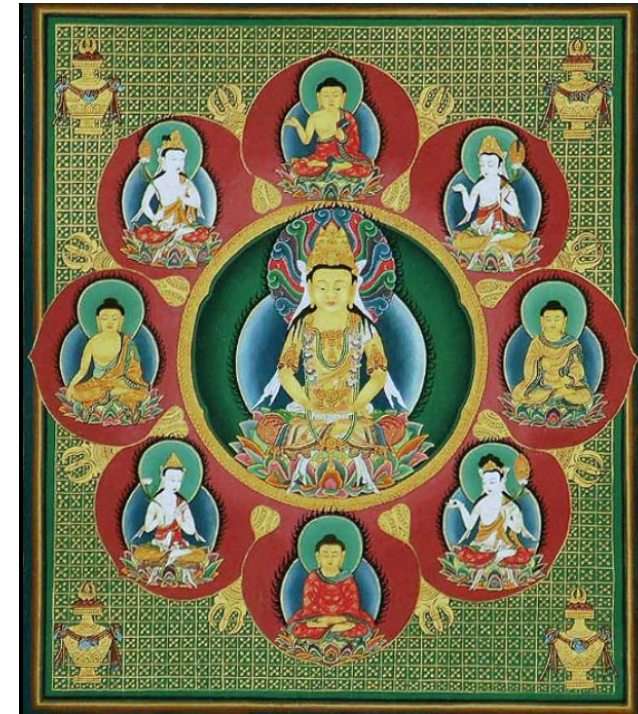
昨年二月、長谷寺の普門院を訪ねたとき、岡田果鳳師に見せてもらったのだが、ある壇家の仏壇の中に、日暮宥貞製作の4センチ四方ぐらいの、長谷寺観音像と脇侍の塙仏があったという。表は観音と脇侍、裏面には「日暮宥貞製作」の文字を見た。この塙仏を朝に夕に拝めと教えたものと思われる。／ 頭の中の仏を、目の前の仏にしている。目に見え、手に触れることの出来る仏にしている。身近かの仏にしている。／ このあたり日暮宥貞の布教のうまさを感じさせる。／ それで、金剛山頂の転法輪寺が、廃仏毀釈で取り除かれ、その仏像、仏具は麓に移され、地福寺が出来たとき、日暮宥貞はその住職として派遣されたのであろうか。ここでも彼は、うまい方法で寺を復興した。／ 地福寺（もとは転法輪寺）の本尊は、法起菩薩という。法起菩薩の化身が役ノ小角だといわれる。小角は山河を歩行し、農業の場をさがした、これは日本の農業の開発者であるとした。／ 時たまたま、日本の人口は2,500万から3,000万、4,000万人へと急激に増加していたときで、国土開発、農業技術の改良、増産が奨励されていたときだった。それで、日暮宥貞は、同寺の本尊を農業の神として、日参講という講を作ってその功德を宣伝し、守護札を出していた。それが、乙木村までひろまり、秀司先生は、その乙木村の信者にすすめられて、その庇を借り、警察の弾圧を緩和しようと考えたのだ。（『創象16号』P2.高野友治.私家版.1983）

「こぶき本」は日暮宥貞の影響

高野氏の曼荼羅宥貞導入説を受けて、八島氏は教祖が教えた一神教的なつとめを、多神教的に変えたのが日暮宥貞だという説を出しています。教祖の話は理解しにくいので、庶民に親しまれていた星曼荼羅などの説教を導入し、分かりやすくした、それを弟子がこうき話にまとめたが、教祖が説く主旨とは違っていたので、それを認めなかったというのです。八島氏はB説支持者なのでこういう見方になります。

何と言ってもこの時期、日暮宥貞のお説教が大きな影響を与えたのです。

ということは、神様の十全の守護はすべて整っていて、われわれつとめ人衆はそれぞれ偏りながらも、皆力を合わせて理想の世界をつくるのだ、こういう一神教の「つとめ」の説明をするのはなかなかむずかしかったのです。／ところが日暮宥貞が華麗に、転輪王尊というのは十柱の神様で泥海中では何々、天にては何々、身の内の守護では仏法では、神道ではというようにやってくれたものだからああ、あのようにやればいいんだと皆思ったのです。／何しろ昔から日本の仏教界の常識では、この星は薬師如来、何星は何如来ということで全部星は仏様であり神様ということになっていたわけですから、日暮宥貞みたいな人間にはすぐに話せるのです。／それで教祖の弟子たちは、その通りやればいいんだということで、書いて教祖のところへ持っていったわけです。／つまり教祖は一神教の十全の守護を説かれ、ばらばらの神様が勝手にやっているんじゃないよ、そこを間違えてはいけないよと教えられているにもかかわらず、弟子たちは日暮宥貞の星曼荼羅の説教に影響を受けて、一に「くにとこたちのみこと」二に「をもたりのみこと」というように、ばらばらの神様がばらばらに守護しているのをまとめて拝んで御利益をもらうような御守護話が、この十三年のお説教以後、十四年本、十六年本となって、元始まりの話としてつくられるわけです。／これは教祖がいらっしゃる頃、教祖のお言葉をまとめようと思ったのですから、教祖が使われていた言葉遣いをそのまま使うわけです。部分的に読めば教祖のお話ばかり並べたように聞えるのです。けれども意味は、一神教を教えようとしているのに多神教にまとめてあるわけです。／自分が神のやしろになって人だすけの心定めをしろとおっしゃっているのに、いろいろな神様、いろいろな星に願いをかけて御守護をもらうという話をまとめたのですから、幾ら一生懸命にまとめ、幾ら教祖の話された口調そのままに書いてありましても、あまりにも主題が違うというので、そんなものじゃないよと落第答案の烙印を押されてしまったのです。(『ほんあづま179号』P24.1984.八島英雄)



胎蔵曼荼羅中央部の中台八葉院

『ウィキペディア (Wikipedia)』より

『古事記』と「元の理」の違い

宗教学者の鎌田東二氏は『古事記』と「元の理」の違いについて述べています。『古事記』の高天原神話が天皇をたてる方向性、天皇発生神話であるのに対して、「元の理」は宇宙発生神話、地球とそこに住む生命体の発生の話になっていることが根本的に違うというのです。また、「元の理」は日本神話の古層のものとの関連があるとも語っています。

「元の理」には日本の記紀神話と似た神名が出てきますが、内実はかなり違います。『古事記』は「天地初めて開けし時、高天原になりませる神の御名は天之御中主神、次になりませる神の御名は高御産巢日神、次になりませる神の御名は神産巢日神、この三柱の神は、みな独神に成りまして身を隠したまひき」という文章で始まっています。ここには聖なる場所として高天原が考えられています。そこで神々が出現しているのです。しかし「元の理」は「この世の元始まりは泥海であった」とあります。天の聖地を想定して始まる神話(『古事記』)と、混沌とした泥海から始まる神話(「元の理」)は根本的に違うと私は思うのです。

「元の理」と『古事記』の決定的な差異は、高天原神話が日神・天照大神の子孫としての天皇をたてる方向性を持っていることです。おそらく奈良朝時代やそれ以前の王権が確立した時にまとめられた神話だろうと思います。それは古いようですが、全体のストーリーには律令体制確立期の歴史事情がかなり反映しています。そして、その神話内容は太陽イニシエーションを表わしていると思われます。それに対して、「泥海こふき」の伝えるものは、地球イニシエーションの意識を伝えているように思うのです。地球そのものの発生、地球と地球に住んでいる生命体の発生を泥海からの生成として宇宙発生神話として語られている、それは高天原にはじまる神々と違って、大地的イメージに満ちているのではないのでしょうか。

泥海は、イメージとして、またシンボルとしては、人間の糞尿に深くつながっていると思います。日本神話の中で古いものと考えられるものに、オノコロ島神話があります。そのなかに天之御柱の周りをイザナギ・イザナミ両神がそれぞれ左・右旋回するという有名な国生みの話があります。その話の最後に不思議な伝えがあります。それは、イザナミの命は火の神・カグツチを生んだためにミホト（女性性器）を焼かれたので身体が衰弱し、やがて黄泉の国に行ってしまいますが、火の神を生んでから、イザナミの命は、タグリ（嘔吐）から金山彦・金山姫を生み、次に糞から神として埴安彦・埴安姫を生み、ユマリ（尿）から神として弥都波能売神・和久産巢日神を生みます。この神は京都の貴船神社に祭られている祭神、奈良の丹生川上神社に祭られています。和久産巢日神の息子が豊宇気比売神であり、豊受の神は伊勢神宮の外宮に祭られている神です。そして、イザナミの命はミホトを焼かれて黄泉に去っていきます。

これは古い伝承と新しいものが混同された神話だと考えられています。新しい部分は編集される段階で陰陽五行説などの影響の下で、金の神、土の神、水の神を生む箇所です。それらの箇所は中国哲学の影響下、七世紀から八世紀にかけてまとめられたものと推測されています。／ それ以前にあったに古伝承において、嘔吐、糞、尿という大地を象徴する排泄物から神々が生まれるという伝承があり、それは非常に重要で、そうとう深い内容があると考えられます。／ また「元の理」では泥海の中で、親神は象徴的動物を食べた後に、その味を試して、また、性を見定めて道具として使っています。一旦食べるのです。食べるというのは古代の神話でも最古層に属する表現だと思います。ものを食べる、排泄するというのは、生命の根源的行動ですから、それと結びつく表現をとることは、世界の創造と変化を表す象徴的表現だと思います。（「神界の宇宙と『元の理』」鎌田東二、『G-TEN』50号.P123）